

同質性と多様性（I）

— 英国における新聞の現状 —

山口 功 二

一、同質性と多様性—階級

「ニュース・リポート」誌は、「ザ・タイムズ」や「サンデー・タイムズ」、それにスコットランドを中心とする地方新聞のグループを所有するトムソン・オーガニゼーションの傘下にあつて、新聞に関する技術部門を中心に編集されている。その一九七八年一月、一二月合併号にボブ・ブルームフィールドによる『日本における「一様性」と題する短い日本新聞論が掲載されている。⁽¹⁾ そのリードは、「それら（日本の新聞）はすべて同じように見える」というのが日本の新聞だ。全部で約一〇紙ほどあり、広汎に正確に出来事を網羅し、著しい一様さで制作されている」で始まっている。ブルームフィールドは、アメリカ人船員のからむある事件で、日本人のタクシー運動手が証言を求められて、「彼ら（アメリカ人の船員たち）は私にとって皆同じに見えるのです」と頭をかきながら告白したという事例を出して、外国人にとってその国の文化の微妙な差異を判別し識別することの困難をほのめかした上でこのことであるが、この指摘は私達にとって別段目新しいことではない。「朝日」「毎日」「読売」という三大全国紙のタイトルを隠して、それぞれの新聞を読むと、注意深くない読者はそれがどの新聞であるか識別に時間がかかるかもしれない。しかし、英国人にとって、「サン」と「タイムズ」、「ガーディアン」と「ファイナンシャル・タイムズ」との区別は

同質性と多様性（I）

同質性と多様性 (I)

簡単に識別できる。それは外国人である日本人ですら可能である。単に形式（レイアウト、広告の取扱、写真の位置等）による判別だけではなくて、内容において、新聞は独自の指向性を明らかにしているからである。

さて、英国人ジャーナリストが、日本の新聞のどこに印しを付けたのかを見ることは、比較メディア論として重要である。その特徴づけは、日本の新聞にとってまったく別の角度をもつ鏡の役割をはたすからだ。ブルームフィールドによれば、日本の新聞は、(1)前述のとおり、一ダースほどのスポーツ新聞を例外として、どの新聞も似通っていること。ここで新聞が政府の強固な新聞統制の下にあるのではなくて、自由がたっぷりある状況の下で互いに似通うこととの不思議さが表明されている。(2)内容における非政治性。(3)発行部数の問題、「読売」朝刊八一〇万部、夕刊四八〇万部。「朝日」朝刊七三〇万部、夕刊四五〇万部。「毎日」朝刊四四〇万部、夕刊二四〇万部。「産経」合併発行部数二七〇万。「日経」朝刊一七〇万部、夕刊一一〇万部。「読売」「朝日」に見合う新聞は、ブラウダの一〇五〇万部くらいである。日本における新聞の統發行部数は約六〇〇〇万部。人口の二人に対して一部宛以上の普及率である。この浸透率は九九パーセントにおよぶ宅配制にある。この発行部数の半分は、前記五紙によって占められている。(4)技術導入における漢字の存在(三〇〇〇〜四〇〇〇字)は、日本の新聞制作上の問題点である。記事を手書きするという方法は、「ジャーナリストタイプライターコンピューター」という最新の技術ラインに、一段階余計な作業が介在することになる。(5)そして、フリート街で統發するストライキは日本ではおこらない。「ザ・タイムズ」と「ザ・サンデー・タイムズ」が一九七九年の九ヶ月で失った発行部数の計は二億部ほどであったが、それは日本でのたった三日間の統發行部数をすこしこしているにすぎない。過去九ヶ月間におけるフリート街が失ったものは、日本の全新聞発行部数に関連させるとさほどひどいとはみえなくなるほどである。

日本の新聞の同質性は、英国の新聞をめぐる諸状況の一端を見ると、再考に値いする問題であることがわかる。英国における新聞所有の寡占的状况は、表面的にみても、様々のタイトルが存在し、地方小都市に行っても、その町の

タイトルをかぶせた新聞があるというふうには、多様であるだけに見えるに、一にぎりの新聞グループ・チェーンに支配されている。日本の状況は、所有権が分散しているにもかかわらず、新聞が同質的傾向をもち、英国の状況は、所有が寡占的であるのに、新聞の形式と質が多様であると言うことができよう。このような両者における新聞事情は、もともと労働集約的な新聞制作が、大量生産体制という現代的状況に当面する時、大きな相違となつてあらわれてくる。思想の自由市場としての新聞という観点から見れば、資本の独占的狀態にあるにも拘らず多様な言論の場を用意している英国の言論状況に成熟さを見ることが出来る。新聞の独自の性格というものは、資本がつくりだすものではなくて、読者がつくり上げるのである。新聞は、つねに言論機関の側面と商品的側面をあわせ持っているものだ。しかし、現在では、新聞は、その商品的側面で論議される場合がおおい。この価値の逆転は、編集者たちに「新聞というものは、ビジネス以上のものだ」という新聞人としての時折の覚醒をよびおこす。

英国新聞の所有権について後にのべることになるが、新しい資本は、過去に新聞界とは無縁であつた石油業、観光業、不動産業資本などから導入されたものであり、新聞の基本的機能、エトスに対して無知であり、無理解な資本の支配が拡大することが考えられる。一九七八年一月から七九年一月にわたつてあらそわれた「ザ・タイムズ」紛争もこうした状況に一端を発している。英国の新聞の存亡は、日本の発行部数競争という明白な基準とはちがう複合的な基準に依拠している。日本の新聞には、読者を獲得することが、発行部数、販売収入につながり、読者の数が即広告的価値をうみ、それが広告収入の増加に連結するという直線的な考え方がある程度納得される基準がある。一九八〇年九月、読売新聞八四六万部、朝日新聞七三〇万部といった発行部数のみが重視される新聞のあり方は、新聞の二大収入源、販売収入と広告収入が発行部数に依拠しているからにはかならない。ここに読者の質を問う基準はない。ということは直線的に新聞の質を問うという基準はないということにつながる。読者はかぎりなく平準化され、均一化され、無性格、無構造、無思想な存在として把握される。だから、新聞の価値を決定するのは、どれだけ多量の

同質性と多様性(Ⅰ)

発行部数をもっているか、という基準はますます強化されつつあるように見える。補強的な関係のなかで、この基準はますます強化されつつあるように見える。

二〇二〇年の間に、フリート街は続々と全国紙をうしなした。最も打撃の大きかったのは、日曜新聞であった。一九五〇年代に廃刊した日曜新聞は、五五年に廃刊した「サンデー・クロニクル」(Sunday Chronicle)のみであったが、六〇年代に入ると、六〇年に「サンデー・グラフィック」(Sunday Graphic)、「エンパイア・ニューズ」(Empire News)、「六一年」(サンデー・デイスパッチ) (Sunday Dispatch)、「六六年」(レイノルズ・ニューズ) (Reynold News)をうしなした。日刊紙では、「高級紙」(quality paper)と「通俗紙」(popular paper)との混合新聞の内容をもっていた「ニューズ・クロニクル」(News Chronicle)を初めとして、「デイリー・スケッチ」(Daily Sketch)、「デイリー・ヘラルド」(Daily Herald)の三紙、夕刊紙では「スター」(The Star)をうしなっている。このうち「デイリー・スケッチ」は、「連合新聞グループ」(the Associated Newspapers Group)傘下の「デイリー・メール」(Daily Mail)に合併された。これに対して新たに創刊された新聞は、一九六四年に「デイリー・ヘラルド」の後継紙として、第一期の「ザ・サン」(The Sun)が生れ、一九七八年に「デイリー・スター」が生れたのみである。「サン」は、一九六九年にタブロイド版に模様がえして第二期「サン」として出現した。この第二期「サン」は、一時は四〇〇万台の発行部数を誇り、現在もなお、全国紙中第一位(一九七九年二月で、三八四二、二五四部)の発行部数をもっている。一九六四年の「デイリー・ヘラルド」の廃刊、「ザ・サン」の創刊という事情は、新聞と読者との関係の変数が、新しい新聞状況を生み出してゆく証言となっている。⁽²⁾一九一二年に小さなストライキ・ピラとして生れた「デイリー・ヘラルド」は、労働党と密接な関係をもち、第一次「ザ・サン」まで知的な労働者階級のための新聞としての性格を持ち続けた。「ヘラルド」はその廃刊の時点においてすら一〇〇万以上の発行部数を確保していた中間新聞であった。一九四九年に王立委員会(Royal Commission on the Press 1947

（1939）が提出した結論と勧告の第四項目にあらわれた指摘、「新聞の数と種類とは、社会の教育、趣味、政治的意見などの相違を、効果的に報道するに十分でなければならぬという第二の標準から見ると、政治的意見では十分に多様性を備えているが、知的水準に関しては多様性が十分でない。最高級紙と大衆紙との開きが、あまりにも大きく、その中間型の新聞があまりにも少い。」⁽³⁾—において、「ヘラルド」、「ニューズ・クロニクル」という二つの中間新聞は、その重要性を明確にされていたといつてよい。廃刊に至る表の理由は、読者の不足というかたちで発表されたが、その潜在的な結論は、その新聞の読者層構成が健全であるかどうかにかかっているのである。読者層調査における技術が洗練されればされるほど、編集者や経営者、それに広告業者が注目するようになる。読者層のあまりに多くの割合を年とった年金生活者や未熟練労働者がしめる「ヘラルド」の新聞読者構成は、当然のように広告業者からしめだされる結果をうむ。一九七九年二月の「ファイナンシャル・タイムズ」(The Financial Times)は、わずかに〇万と七〇三の発行部数しかもっていない。約四〇〇万近い発行部数をもつ「サン」と対比してみると、広告業者にとって読者とは何か、という意味がはつきりとする。このように、広告の目標となる読者をもつ「高級紙」を選ぶか、販売収入で自らを支える「大衆紙」としての道をえらぶかが眼の前にさし出されているのである。「デイリー・ヘラルド」からブロードシートの第一期「サン」への変身は、新聞の主調をあまり変えず、読者層をレジャー指向をつよめている若者層に切り換えようとするものであったが、第二期タブロイド版「サン」を支配することになったR・マードックは、読者も広告もつかない中間紙の性格を放棄し、ヌード写真を第三頁目に掲載し、性と結婚のすべてを自由に呈供するまったく従来とはことなつた新しいスポーツ・ジャーナリズムを導入した。

これに対して、日本のジャーナリズムは、「高級紙」と「大衆紙」という両極に分断する新聞を選択することなく、ただひたすら中間新聞を拡大する道を行ってきた。だが、日本の新聞の中間紙的性格は、「高級紙」と「大衆紙」という独立した新聞市場が存在しないことから、両者を橋渡しするという媒介的(intermediate)な側面をかいている。

同質性と多様性 (I)

また中間階級という確固とした階級を背景とする読者をもっているわけではない。それは、「高級紙」と「大衆紙」の混合型として定義することもできない。むしろ階級を一つに包括し、階級を融合した読者を対象とし、その成分を分解分析することの不可能なやや高級紙的傾向にかしいだ中間紙という印象を与えている。だが日本の戦後の経済的成長が上昇的であったことから、中間階級が肥大化し、それが読者として転化していると考えられる。これに対して、英国の国際社会における経済力は低下し、中間階級は、「英国病」とよばれる企業紛争のなかで力をうしなつてゆく。中間階級のための予備軍であるホワイト・カラー労働者の賃金も、新聞界における印刷機械工の賃金が記者賃金を抜いている例に見られるように逆転している。一九四八年にフリート街の発行部数の六〇パーセントは中間階級を背景とする読者集団であったが、それが一九六五年には、四七パーセントにおちた。そして現在では、わずかに「デイリー・メール」(Daily mail)がこの層をあてにしているが、その割合は、一五パーセント以下におちこんでいる。⁽⁴⁾

さて、それでは、新聞の多様性をささえている読者と新聞は、どのような関係にあるのだろうか。第一図は一九七八年における全国紙の日刊紙、日曜紙の読者像の構成図である。読者層は、J I C N A R S (Joint Industry Committee for National Readership Surveys) によって採用されている A、B、C₁、C₂、D、E の六つの社会的階層に分類されている。

A、中産階級 (upper-middle class)、成功したビジネスマン、専門家、大きな一家建か、金のかかるフラットに住む外科医、七五〇人以上の生徒をもつ学校の校長、二〇〇人以上の雇人もつ企業の役員、シニア・ジャーナリストなど上級の行政職、経営者など。

B、は、ミドル・クラス。彼らは「金持であるとか贅沢であるよりもむしろ相当な体裁と地位のある」生活のスタイルをもつ。小さな学校の校長、上級管理者である公務員、大学講師、小さな病院の婦長、小図書館長などが含まれる。

第1図：1978年の新聞読者像

同質性と多様性 (I)

| | | A | B | C ₁ | C ₂ | D | E | |
|----------------|----|------------|----|----------------|----------------|----|----|---|
| 15歳以上の人口パーセント | | 3 | 13 | 22 | 32 | 21 | 9 | |
| 日刊紙 (全国) | 読者 | | | | | | | |
| サ | ン | 12,267,000 | 1 | 5 | 17 | 41 | 29 | 7 |
| デイリー・ミラー | | 11,841,000 | 1 | 6 | 17 | 39 | 29 | 7 |
| デイリー・エクスプレス | | 6,735,000 | 3 | 15 | 29 | 30 | 18 | 7 |
| デイリー・メール | | 5,465,000 | 4 | 16 | 31 | 28 | 15 | 6 |
| デイリー・テレグラフ | | 3,171,000 | 13 | 37 | 30 | 13 | 6 | 2 |
| ザ・タイムズ | | 925,000 | 18 | 34 | 28 | 12 | 6 | 2 |
| ガーディアン | | 861,000 | 9 | 41 | 30 | 14 | 6 | 1 |
| ファイナンシャル・タイムズ | | 707,000 | 16 | 36 | 33 | 9 | 5 | 1 |
| 日 | 曜 | 新 | 聞 | | | | | |
| ニュース・オブ・ザ・ワールド | | 13,297,000 | 1 | 5 | 16 | 40 | 39 | 9 |
| サンデー・ミラー | | 12,149,000 | 1 | 7 | 20 | 40 | 26 | 6 |
| サンデー・ピープル | | 11,304,000 | 1 | 7 | 19 | 39 | 27 | 8 |
| サンデー・エクスプレス | | 8,582,000 | 5 | 21 | 32 | 24 | 12 | 5 |
| サンデー・タイムズ | | 3,777,000 | 13 | 33 | 31 | 15 | 7 | 2 |
| サンデー・テレグラフ | | 2,500,000 | 11 | 31 | 32 | 16 | 7 | 2 |
| オブザーバー | | 2,282,000 | 9 | 32 | 31 | 17 | 8 | 3 |

E. Dennis MacShane, 'Using the Media' 1979 pp.16, 17.

C₂ は、下位中流階級 (lower-middle-class) であり、小規模の商業を営む者、ホワイト・カラー、タイピスト、電話交換手、看護婦、教師補などであり、彼らの多くのものは、熟練労働者階級として区分されるC₂ におけるものたちよりも収入が少ない。

同質性と多様性 (I)

C₂ は、職長、組立工、メリヤス工、配管工、責任のある労組助手、刑務所の看守など。

D、は、完全な肉体労働者、半熟練、未熟練工、漁師やバスの車掌、交通監視員、窓ふきなどの仕事に従事しているものを含む。

E、は、老人年金でくらししているもの、未亡人、社会保険に依存しているものなど。

日本と違って、英国の階級構造は、階級独自の習慣、生活様式、言葉遣い、通うバブに至る迄、暗黙の区分標識をもっているほどだ。上流階級には、上流階級のカルチュアが存在し、別の階級に属するものが、その上の階級に上昇することは、その根源に文化的な障害があり、その文化に適合することが難しい。この文化的な障害を無理にこえようとするとスノップとして貶められる。そのために階級は一つの住居区の役割をはたし、この住み分けの論理によって階級は安定する。そのために英国における人種偏見は、アメリカ合衆国におけるような「この店はお客を選ぶ権利があります」という看板に見る顕在的差別としてあらわれてこない。イアン・ブラドレーは「いかにして英国は階級的障害を維持してきたか」という表題で、J・H・ゴールドソープの『現代英国における社会移動と社会構造』⁽⁶⁾とA・H・ハルゼイの『生れと行き先—英国社会における家庭、階級そして教育』⁽⁷⁾とを「タイムズ」紙上で論評しているが、⁽⁸⁾ゴールドソープの二〇歳から六四歳にわたる一万人を対象とするインタビューによる調査研究が示めず結論は「過去六〇年間にかかなりな上昇的な移動が英国にあった。」「一般的な経済成長と職業的構造の変化によって多くの人がトップ（の階級）に到達した。だが「異なる社会階級に生れたものが、トップに到達できる相対的な機会については全然変化がなかった」のである。そして「階級構造の一般的本性はより大きな不平等性に向って動いている」。「英国における政治的左翼指導部の最大の失敗は社会におけるこれらのおぞましい不平等性の永続について余りにも受動的であったことである」であった。またハルゼーの研究は労働者階級の少年が大学に行くことのできる機会中は流階級の少年の一分の一、一八歳まで学校に残れる機会、高等教育をうけられる機会は、学校をはなれる年齢が引

き上げられたのにもかかわらず、一九一三と二二年の労働者階級の子供たちよりも一九四三と五二年の子供たちのほうが少なくなっているのである。ブラドレーは、ゴルドソープのおそれ、経済的な不況が労働階級の子供がトップに到達する機会を少なくするのではないか、上流階級がもっと階級防衛的になるのではないかという観念を強調しているが、このような予兆的傾向を英国のジャーナリズムの七〇年以降の動向に見ることができよう。

一五歳以上の人口のうち一六パーセントがAとBの階層である。各全国紙の読者構成を見ると、「デイリー・テレグラフ」の読者の五〇パーセント、「ザ・タイムズ」の五二パーセント、「ガーディアン」の五〇パーセント、「フライング・タイムズ」の五〇パーセントがAとBの階層の読者でしめられている。これら四つの「高級紙」の読者の五〇%近くが、AとBの階層にしめられていることがわかる。そして、ローワー、ミドルと分類されるC₁とC₂の高級紙読者比較においてもホワイト・カラ：労働者であるC₁の階層が圧倒的に多い。これに対して、人口の三〇%を占めるD・Eの階層は、高級紙読者の六%から八%にすぎない。このような新聞読者の傾向は、三つの「日曜高級紙」、「サンデー・タイムズ」、「サンデー・テレグラフ」、「オブザーバー」についても同様の特徴を示している。四つの「大衆紙」のうち「サン」と「デイリー・ミラー」の二紙は、労働者階級、C₂とD、中流下層のC₁に読まれていて、「サン」は、八七%、「デイリー・ミラー」は八五%この三つの階層に依存している。他の二紙、「デイリー・エクスプレス」と「デイリー・メール」は、やや中間階級紙的な読者構成をもつが、前者はややC₂・Dの労働者階級にかしいだ、後者はC₁、中流下層にかしいだ読者構成をもっている。

このように英国では、新聞の購読習慣が、彼の属する階級までもさし示す指標となる。ある地区の新聞販売店(News agent)で売れる新聞の傾向は、そのまま地区住民の階級、職業的な階層をあきらかにしたりする。また最終学令(TEA-Terminal Education Age)と新聞の読者構成とは、密接な関係があることが報告されている。⁽⁹⁾

日本での新聞を讀んでいようと、彼の出自、學歷、職業、収入などの屬性を物語るきっかけにはならない。この

同質性と多様性（I）

階級がくつきりと見えないという根には、人が置かれた立場立場で独自の文化様式を創造する能力の欠如、それぞれの階級を自ら識別できる認識力の欠如があり、それはコミュニケーション・メディアに社会的標識をうしなわせる結果になっている。

二、同質性と多様性—政治性

ある広告コピーライターの描いた全国紙のコピーが、フレッド・ハーシュとデイビッド・ゴードンの著者「ニューズペーパー・マネー」に紹介されている。

『「ザ・タイムズ」は、国を支配している人々によって読まれている。

『「ガーディアン」は、国を支配したい人々によって読まれる。

『「ファイナンシャル・タイムズ」は、国を所有している人々によって読まれる。

『「デイリー・テレグラフ」は、昔ながらの国を回顧する人々によって読まれる。

『「デイリー・エクスプレス」は、国がまだそのままであると考える人々によって読まれる。

『「デイリー・メイル」は、国を支配している男たちの妻によって読まれる。

『「デイリー・ミラー」』（かつてそれ自身国を支配しようとしたところのみた）は、彼らが国を支配したと考える人々によって読まれる。

『「モーニング・スター」は他の国がこの国を支配してほしい人々によって読まれる。

『「ザ・サン」』、さて、マードックは、この市場におけるギャップ世界でもっともふるいギャップを発見した。」

これは一つの冗句であるが、英国におけるナン・ナル・ペーパーの特徴を適格に素描している。一九七六年のTUC大会の終りに、議長であったシリル・プラント (Cyril Plant) は、この文安の変型で新聞を論じたが、その最後の項目で、「ザ・サン」の読者にふれ、「さてそこで、もちろん、サンの読者であるが、彼らはいわさ話のたねがあるかぎり、誰が国を支配しようが気にもしない」と「ザ・サン」の非政治性を指摘している。新聞市場のギャップの発見とは、保守党系の「デイリー・テレグラフ」、右翼的な「デイリー・エクスプレス」、自由党系の「ガーディアン」、労働党系の「デイリー・ミラー」、小市民階級向けの「デイリー・メール」共産党と密接に結ばれている「モーニング・スター」というふうにならかの政治的色彩をおびているこの政治市場におけるギャップとは、非政治的であることだった。そして、その非政治性を満たすものは、新聞市場におけるもう一つのギャップ——「性」の領域であった。しかし、非政治的であることは、純粋に非政治的でありえない。非政治的であることは、立派に政治的立場であるのだ。前にのべてきたように、「サン」は、労働党と密接な関係にあった「デイリー・ヘラルド」の伝統にある後継紙である。一九七〇年の選挙の時点で「サン」は市場の一〇%を握っていた。一九七四年の一般選挙では、全国紙——日刊紙の発行部数の四〇%以上が保守党支持であった。この時「サン」はR・マードックの下で市場の二三%をしめ、全党連立政権の推進にあたった。マードック支配の五年間で、その市場占拠率は二八%となり、最大の発行部数をもつ日刊紙として、保守党色をつよめた。現在この「サン」の浮上によって、プロ保守党の新聞は、市場のほとんど七〇%を占めるに至っている。^①

第二図は、全国紙の発行部数表である。この表には、「モーニング・スター」が登録されていないが、「ベン新聞年鑑」一九七九年度版によれば、一九七八年一月—六月の平均発行部数は、三五、四六三にすぎない。また「デイリー・スター」という新しい新聞が登場しているが、これは「モーニング・スター」とは、まったく関係がなく、一九七八年、一月トラファルガー・ハウス傘下のエクस्प्रेस・ニューズペーパーから創刊された大衆紙である。同

同質性と多様性 (I)

第2図 全国紙の発行部数
1979年12月ABC調べ

同質性と多様性 (I)

| | |
|----------------|-----------|
| 1. 日刊大衆紙 | |
| サン | 3,841,254 |
| デイリー・ミラー | 3,556,413 |
| デイリー・ニクスプレス | 2,290,487 |
| (地方版は含まず) | |
| デイリー・メール | 1,916,146 |
| デイリー・スター | 970,635 |
| 2. 日刊高素紙 | |
| デイリー・テレグラフ | 1,420,263 |
| ザ・ディアン | 366,423 |
| タイムズ | 360,257 |
| ファイナンシャル・タイムズ | 200,706 |
| 3. 大衆日曜紙 | |
| ニュース・オブ・ザ・ワールド | 4,543,337 |
| サンデー・ピープル | 3,900,074 |
| サンデー・ミラー | 3,920,405 |
| サンデー・ニクスプレス | 3,112,178 |
| 4. 高級日曜紙 | |
| サンデー・タイムズ | 1,470,438 |
| サンデー・テレグラフ | 1,045,076 |
| オブザーパー | 1,003,949 |

社は、他に「デイリー・ニクスプレス」、「サンデー・ニクスプレス」、「イブニング・スタンダード」を出している。ネーミングでは、それはすでになくなった全国紙「夕刊紙」「ザ・スター」を継承している。「デイリー・スター」は、全国紙新聞の印刷センターとしてのフリート街から離れて、「ニクスプレス」の使用しているマンチェスターの印刷プラントで率行された。それは、「タイムズ」の争議などに見られるフリート街の労働状況—人事問題と賃金がマンチェスターのほうが有利であるという理由、さらに北部イングランドで印刷所をもっていない「サン」との競争によって有利であるという理由で計画された。これに対して新聞関係の諸労組、記者労組のNUJ (National Union of Journalists)、印刷関係の熟練工で組織されてくるNGA (National Graphical Association)、印刷関係の未熟練工事務職員などから組織されてくるNAISOPA (National Society of Operative Printers, Graphical and Media Personnel)、写真、製版などから従事するものを組織してつくるIADA (Society of Lithographic Artists, Designers, Engravers and Process Workers)それから新聞の配送に関係する労働者のSOCI (Society of Graphical and

Allied Trades) 等は、フリート街の賃金契約の北への輸出を組織的にキャンペーンした。⁽¹²⁾ 「デイリー・スター」は、「デイリー・エクスペレス」と同じ階層の読者を市場としている。この理由は、この市場で先行する「サン」と「デイリー・ミラー」を、特に労組関係読者を中心とする「ミラー」の発行部数を蚕食することにあつた。

第3表：労働組合役員の新開講読の型

| | |
|---------------|-----|
| ガーディアン | 65% |
| デイリー・ミラー | 45 |
| モーニング・スター | 35 |
| ザ・タイムズ | 30 |
| サン | 25 |
| デイリー・テレグラフ | 20 |
| ファイナンシャル・タイムズ | 15 |
| デイリー・エクスペレス | 10 |
| デイリー・メール | 10 |

数紙定期的に併読している者がいる
ためパーセンテージは100をこえる。⁽¹³⁾

な傾向が強く、TUC自身も、大発行部数をもつ新聞のなかで、「デイリー・ミラー」と「ガーディアン」は、「保守党以外の誰かを支持する」ことを期待されてはいるが、「だが、これら二つの新聞はTUCによって採用される政策に全幅の支持を与えているのではない」ということを認めている。⁽¹⁴⁾ 「ガーディアン」は、「デイリー・テレグラフ」とともに、新聞発行が社の中心事業である数少ない経営方式によって、過去にも、スエズ紛争におけるイーデンの帝国主義的な方針に反旗を掲げた唯一の新聞であつた。その時、三分の二に減少した広告収入の損失を補填したのは、同じ「トラスト」が刊行している夕刊紙「マンチェスター・イブニング・ニューズ」が生み出した利益であつた。

同質性と多様性 (I)

第三表は、一九七四年からNUJの幹部であり、一九七八年から七九年にかけてその議長であつたデニス・マクシェーンの作成によるものである。それによると、労働組合の指導的立場にいる役員たちがどの新聞に共感をもつて読んでいるか、その一端がうかがわれる。彼らが、「高級紙」では、「ガーディアン」を、「大衆紙」では「デイリー・ミラー」を好んで読んでいることがわかる。新聞と政治的な立場とが密接に関連し合っている図柄がここで読みとることができる。しかも、その関連の底合は、共産党と「モーニング・スター」の例を含めて、機関紙という従属的な関係によるものではない。ことに、労組役員たちをもつとも定期的に読んでいる「ガーディアン」は、独立的

『ガーディアン』に対する左翼読者は、党派に密着しない距離感のある報道への信頼を軸にしている。人権主義、高度な水準とが左翼読者の期待となつてこの新聞への支持となつてゐる。

労働組合の役員の購読傾向に対して、一九七一年に「タイムズ」のおこなつたヨーロッパのトップたちが何を読むかという調査がある。第四表によれば、労働組合役員の購読傾向の第一位にあつた『ガーディアン』は、英国の高級紙の中では最も下位にランクされている。この調査は英国だけではなく、西ヨーロッパの管理者階級を対象として行なわれているためにこれが英国の政治的状況を忠実に写していると即断はできないが、彼らにとつて有用な情報と政治的、経済的な傾向をこの序列は示しているとは言いうるであらう。西側ヨーロッパのトップたちの定期的購読の対象として「タイムズ」と「フアイナシヤル・タイムズ」がそれぞれ二、三位をしめ、不定期購読の対象としては、一、二位、そして第三位には、くっきりと「保守党」支持をあきらかにしている「デイリー・テレグラフ」がのつている。「ガーディアン」の位置

第4表：ヨーロッパのトップたちは何を読むか。(15)

| 読者層 | 購読率 (%) | 紙名 | 購読率 (%) |
|-----------------------|---------|----------------------|---------|
| ビジネスマン、政治家、定期購読者 | 37 | タイムズ | 81 |
| ル・モンド | 36 | フアイナシヤル・タイムズ | 78 |
| タイムズ | 28 | デイリー・テレグラフ | 58 |
| フアイナシヤルタイムズ | 21 | ル・モンド | 52 |
| ノイエ・チュエリツヒヤ・ツアイツング | 18 | インターナショナルヘラルド・トリビューン | 47 |
| ル・フィザロ | 18 | ル・フィガロ | 43 |
| インターナショナル・ヘラルド・トリビューン | 17 | ウォール・ストリート・ジャーナル | 42 |
| フランクフルト・アルゲマイネ | 16 | フランクフルトアルゲマイネ | 39 |
| デイリー・テレグラフ | 12 | ガーディアン | 39 |
| ディ・ベルト | 10 | ノイエ・チュエリツヒヤ・ツアイツング | 38 |
| ガーディアン | | | |

International who's Who から抽出れた政治家とビジネスマンのサンプルに基く、その4分の1は英国の被験者である。Research Service Ltd. のタイムズのための調査。1971.

は前者では一〇位、後者でも九位である。新聞がその内容の傾向と政策によつて読み分けられるという新聞の分化したかたちがここでよみとることができる。日本の過度に大衆化し、読者一人一人が自己の置れている階級、位置も認

第5図：日刊新聞読者の党派支持率%1970年（ ）内は1967年。

| 新聞 党支持 | 労働党支持 | | | 保守党支持 | | | | | |
|-----------|------------|----------------|---------------|-----------------|-----------------------|-------------------------|----------------------------|---------------------------|--|
| | サン | デイ ・ミ ラー | ガー デー ン | デー ・ス ケッチ | リス ・エ クス プレス | デー ・リ リース タイムズ | デー ・リ ール ・メ イル | デー ・リ ーグ ・ラ フ | フ ァイ ン ・タ ン ・タ ン ・ イ ン ・ シ ャ ム ズ |
| 保守 | 22 (18) | 27 (28) | 28 (30) | 52 (53) | 54 (47) | 52 (53) | 62 (56) | 65 (67) | 72 (72) |
| 労働 | 60 (69) | 56 (53) | 52 (36) | 36 (31) | 33 (33) | 22 (29) | 28 (29) | 20 (16) | 11 (11) |
| 自由 | 7 (7) | 8 (9) | 15 (19) | 5 (7) | 5 (10) | 11 (8) | 3 (8) | 7 (10) | 11 (9) |

NOP POLLING 1967年7月, 1970年10月。(16)

同質性と多様性 (I)

識できず、自己の利益を代表する新聞、自己の政治的、社会的、経済的、文化的な思想を同一化するメディアを選択できないでいる状況とくらべると、英国の新聞と読者の関係は、新聞が読者を設定し、読者が新聞を選択するという相互認識の関係にあると考えられる。しかし、その相互認識は複合的であり、労働党支持者は必ず、労働党支持の新聞である「ミラー」を読むという直接的な関係であらわれるものではない。第五図は、英国の日刊全国紙読者の党派支持率をしめしている。この表のなかの「デイリー・スケッチ」は現在では存在しない。新聞の政党支持と読者の政党支持は「ファイナンシャル・タイムズ」の読者の七二%が保守党支持であるというようになり正確に平行的であるように見えるが、「エクスペレス」や「スケッチ」は、さほどくっきりとした平行状態にあるとは見えない。しかし、日本の『朝日新聞』『読売新聞』『毎日新聞』と並べて同種の調査を行なったとしても第五図のようなくっきりとした新聞の政党支持と読者の政党支持の平行主義はあらわれてこないだろう。このような新聞と読者のパラレルな関係が、英国新聞の政治的多様性、独自性を生産してきたと言えるであろう。相互にちがいを認識できるほどに新聞が明確な政治的ジャーナルを書くことが、逆に政治的認識のある読者を育てる。そしてその読者が新聞を識別するという政治的成熟への好循環の構図がここにあるといえる。だが、こうした政策的な識別の明確化が、大量の読者獲得という目標のために徐々に薄められる傾向にあ

同質性と多様性 (I)

る。

以上のように新聞はそれぞれに政治的な立脚点を読者に明らかにしており、また新聞は読者に対するイメージ形成の戦略を平行的に用意しようとしている。その戦略の最前線にいるのは、それぞれの新聞の内容を決定する編集者である。一九七七年にブライアン・ウイルソン (ユニバーシティ・カレッジ・カーディフのジャーナリズム研究センターの出身者で、二三歳で「ウエスト・ハイランド・フリー・プレス」⁽¹⁷⁾ The West Highland Free Press を創刊した) がフリート街編集長をインタビュウしているのだが、それによれば、編集者の個性と新聞の性格とが一つの関連をもっていることが読みとれる。

たとえば、「デイリー・メール」のデイビッド・イングリッシュ David English は、「われわれは普通の人々 (Ordinary people) を支持する」、しかしそれでは労働組合員は普通の人々ではないのかという問いに対しては「そうではない。彼らは普通の人々プラス・ワンだー彼らをたすける労働組合の強さがある」とのべている。この姿勢は「デイリー・メール」の小市民的性格と合致する読者選択である。「デイリー・エクスプレス」のロイ・ライト Roy Wright は「今日、この国のほとんどの刺戟的な思考はラジカル・ライトからやってきている」そして「私はエクスプレスをこの路線におきたい」とのべ、これからの読者増加の方針を女性層と「サン」よりももっと本質的なものをもとめて「ミラー」を読んでいるが、それに幻滅している読者層にもとめている。英国における右翼保守化の傾向は、大きく要約すれば、体制が英国病と呼ばれる企業紛争の源と考えている労働組合に対する攻撃、移民法の底流をなすアジア・アフリカ系の移民制限—これは旧植民からの移民によって職を奪われることになった下層労働者、商店主などの根強い人種偏見に支持をえている。たとえば、一九六七年二月に成立した「ナショナル・フロント」(The National Front) は、一九六〇年代に急増した有色人種移民に対する軟弱な政治への幻滅、そこから強力な指導者をもとめる動向を下敷きにしている。組織の大部分は中年で、第二次大戦で闘った結果に裏切られたという感情をもつ

ていて、はっきりとした信念と、組織化の能力をもっている。そして、組織の補給源は、有名なフットボール・チームに声援をおくっている、力強い指導者をもとめている白人の少年たちである。彼らは、アジア・アフリカ系を攻撃することで、逆に祖國との一体感、攻撃的な忠誠心を満足させるのである。⁽¹⁸⁾

労働党の政策に近い「デイリー・ミラー」のマイケル・モロイ Michael Molloy は、自分の政治思想を「穏健な労働党」とのべている。彼はフリート街の編集長としては型やぶりの経歴をもっている。彼はイーリング芸術学校 Ealing School of Art で訓練をうけ、「書かれた言葉」よりも「ヴィジュアル」な部分にたずさわってきた。ある意味でこの履歴は将来のジャーナリズムを先取りしていると言えるかもしれない。現在の新聞は活字的な側面に重点を置いている。マス・ジャーナリズムとしての新聞はもっと視覚的部分を重視する必要があるようになる。そして、このマス・ジャーナリズムの旗手である「サン」の編集長であるラリー・ラム Larry Lamb は市場調査で使用されている階層化の用語について「A B C Dの用語は私をうごかしはしない。私は市場傾向を真にうけたりしない。三八〇万も新聞を売っているとすれば、労働階級の人々に売っていることなのだ。新聞は市場のどれか一つの部分を目的としているのではない」とのべて、新聞の階級の分化をさけて、大衆を的とする新聞の方針を明らかにしている。そのため、彼は「エキスプレス」のロイ・ライトのように簡明な政治的な立場を呈示してはいない。彼自身の政治学について「私は右派思想を持っていない。私自身はまあ中道左派 left of centre である。しかしわれわれは実際的な経済政策を信じている。そして経済的争点において我々は最近の労働党政府の政策に反対している。社会的争点において、われわれの新聞は著しく進歩的である」とのべている。ここには、右左両派に対する微妙な態度が含まれている。政策と思想との操作的な発言は、「サン」の大量読者のために脱政治的にならざるをえない事情を物語っている。

同質性と多様性 (I)

三、同質性と多様性―所有

さて、ここまで新聞の政治的傾向と読者、新聞と編集者との関係についてのべてきたが、新聞所有者と新聞の政治的性格について考えてみたい。政治的党派と新聞の関係は新聞が企業として独立するまで政治的党派と党人への財政的依存の関係をとってきた。この一九世紀的な光景が終りをつげるのは、一八九六年に創刊されたノースクリフ Northcliffe の「デイリー・メール」の出現にある。新聞は、その財源を主として読者から手に入れることができる能力を手中にした。政治家と党派は、新聞の大衆化によって新しい対応をしいられることになった。新聞は政治家と読者の中間にあつて独自の政治的役割をはたすようになる。新聞は政治から支配される関係から、政策を支持し、反対する独自の勢力に転化し、党派にとっては重要な支持母体を形成する。その一方には、政党新聞 party paper の型式があり、他方には新聞の経営者の個人的支持によって新聞が政党と非公式に関わり合う型式がある。新聞とその所有者との関係を考えるために、新聞経営者たちを素描してみる必要がある。「ニューズペーパー・バロン」と呼ばれるように英国の新聞経営者たちは、政治に積極的に参加し、政治を動かしてきた。英国における最初の新聞経営者であるアルフレッド・ホームスワース Alfred Harmsworth は、「デイリー・メール」の発刊の九年後の一九〇五年にロード・ノースクリフとなり、彼の弟の Harold はロード・ロザメア Lord Rohermere となり、一九二二年ノースクリフの死ののち、「メール」を継いでいる。カナダの資本家であつたマックス・ニイトケン Max Aiken は一九一六年に「エクスペレス」を入手し、ロード・ビーバークルク Lord Beaverbrook となり、彼の新聞を保守党の政策に参加させることによって、党内政治にまでその影響力をふるつた。彼は一九六四年六月、八五歳で死亡、その後、一九七七年六月三〇日、「デイリー・エクスペレス」、「サンデー・エクスペレス」、「イブニング・スタンダード」を含む彼の新聞グループ「ビーバークルク・ニューズペーパーズ」は不動産会社の「トラファルガー・

ハウス」に売られ、三代六〇年にわたった新聞帝国は終焉した。南ウェルズ出身の新聞ファミリーのベリー Berry は、スコットランドを中心とする数多くの地方新聞のタイトルル、それに「サンデー・タイムズ」を所有し、ロード・ケムズリー Lord Kensley となった。このケムズリーの新聞グループは、ビーバーブルックと同じようにカナダの資産家であったロイ・トムソン Roy Thomson によって一九六四年に買収された。そして、ロイ・トムソンは、ロード・トムソンとなり、ノースクリフの死後、アスター・ファミリーの手にあった「タイムズ」を一九六六年の終りに手に入れたのである。政治家に目を転じれば、ロイド・ジョージ Lloyd George は首相辞任後、自由系の「デイリー・クロニクル」を買い一九二三年から二六年に至る三年間それを所有していた。一九二八年まで「デイリー・テレグラフ」を所有していたロード・バーナム Lord Burnham は保守党の政治家であった。また自由党派のキャドバリー・ファミリーは一時勢力のあった「デイリー・ニュース」を支配し、それを併合した「デイリー・クロニクル」を所有していた。キャドバリー家は新聞を廃刊すると資本をチェコレートとテレビにふり向けた。IPC (International Publishing Corporation) の代表であったセシル・キング Cecil King は一九六四から七〇年迄労働党と関わりをもっていた。そこで「デイリー・ミラー」は労働党支持の姿勢を継続している。「マンチェスター・ガーディアン」の編集長であり、また所有者となったC・P・スコット Scott は、自由党政治家でもあった。しかし、こうした新聞が政治家、個性ある新聞人により所有され経営されるという時代は終焉しつつある。レイモンド・ウイリアムは、ノースクリフやビーバーブルックによる新聞所有を前期資本主義社会における状況と見ている。ノースクリフやビーバーブルックが政治に大きな影響を与えたといっても、それは舞台にたとえれば、彼らは客席の最前列に座っていたというだけであり、けしてステージに立っていたというわけではないのであるが、その前列に座っている新聞人たちは個々の顔立ちをもっていた。しかし、今われわれは後期資本主義社会の新聞と対面しているのである。新聞の所有は、くつきりとした個人の貌としてあらわれてくるのではない。新聞の所有は、財団、トラスト、グループと

同質性と多様性 (I)

同質性と多様性 (I)

いうコングロマリットな形態による。個人的な体面として利益のない新聞を所有しつづけるとか、自己の主義主張のために新聞を所有しようという個人的営為としての新聞づくりはすでに死滅しているのである。経済的な判断基準に合致しないメディアは排除されて、経済的メリットに合致するメディアが残るといふ、単なる資本の論理だけが残る。C・P・スコットが一九二二年五月に「マンチェスター・ガーディアン」紙上で述べた名言「新聞というものは、ビジネス以上のものである」という言葉は、「新聞とはビジネスそのものである」と言い換えられる状況に立ち至っている。新聞の経営者たちは、言論の自由を存続させるためには、新聞が財政的に自立することが必要であり、新聞制作上のコスト、(それは主に人件費であるが)、それが上昇することは新聞の存立それ自身を危くするものである。経営者が新聞に投資することが有利な投資であるとき、新聞それ自体が健全になり、新しい新聞の創刊が期待できるかもしれないという論理を用意する。しかし、一九七九年の記者労組NUJの発表している『新聞協会 News-paper Society へのNUJ要求書』⁽²⁰⁾によれば、「NUJは、地方新聞産業が深刻な危機にあると信じている。それは企業のバランス・シートにあらわれた危機ではない。その危機はジャーナリストたちが置かれている条件や生活水準においてあらわれたものだ。そして、それは地方新聞の編集の質に影響を与えるおそれがある。危機の徴候はすでにあきらかである。見習い記者と同じようにシニアの記者たちもジャーナリズム界からドロップ・アウトしつつある。

(ACAS Report 1977)。そして雇用者側は質の高いジャーナリストをひきつけておくことに困難を感じつつある。」とのべて、「この危機のルーツは低賃金にある」と結論づけている。この要請は、ピーパーブルック時代の「エクスプレス」がジャーナリストを好遇した状況から新聞が遠く離れてきたことを示唆している。新聞労働者は他の産業に働く労働者よりも低賃金であり、その中でもジャーナリストは悪条件におかれている。NUJよりも「新聞協会」側に近づき、「英国新聞編集者ギルド」GBNE: the Guild of British Newspaper Editors の代表であるロリン・ブランガン Colin Brannigan は、地方新聞の記者たちの賃金が全国紙、ラジオ・テレビの記者とくらべて低いこと、それ

から、彼らの賃金は多くの場合、印刷工などの製作部門労働者、(熟練、未熟練工とわず)、低いことを指摘している。⁽²²⁾ 新聞社の中で、記者の待遇が、他の部門の労働者よりも悪いことは、NUJ要求書の中にももりこまれていた。

それによれば、一九七五年一〇月における一三の新聞社で平均年収が植字工より記者の方が多い新聞社はわずか三社にすぎず、記者よりも機械室助手の方が年収が上位である社が七社に及んだ。一三社中、記者年収の最高額は四、三〇〇ポンド、最低額は二、三〇六ポンドであり、平均は三、四一一ポンドであった。これに対して植字工は、最高年収五、三八九、最低二、六五二、平均四、一八六ポンドであった。機械室助手は、最高四、九〇七、最低二、八六〇、平均三、六九三ポンドとなっている。新聞の内容を決定するジャーナリストに対するこのような悪条件は、年に千名の補充を必要とする地方新聞スタッフ不足をひきおこし、多くの新聞は記者、サブ・エディターの空席が著しい状況にある。低い賃金と人手不足による超過勤務は歴史的に平穩であった労使関係にひび割れを生む結果となった。一九七八年十二月に打たれた地方新聞ストライキは、NUJメンバー、八、五〇〇人を含む、NUJの歴史の中でも最も重要な争議となった。

それでは、後期資本主義社会における新聞所有の形態は、具体的にどのような変化を見せたのか。全国紙は現在「ガーディアン」と「デイリー・テレグラフ」等の例外を除いて、英国コングロマリットや、カナダやオーストラリアに基盤を置く多国籍企業によって所有されている。地方新聞は、全国紙が会社組織で経営されてきた長い歴史をもっているのに、歴史的に一族支配という個人的所有によって経営されてきた。このファミリー支配の伝統から、夕刊紙の約四五％が、週刊紙の七五％が地方資本の新聞グループ、個人企業家の所有の下にある。しかしロンドンに基盤をもつ新聞のチェイン・グループの傘下に入る新聞の数は増加現象にある。一九六〇年代にその増加現象は加速され、一九六九年にイングラントとウェールズの地方新聞の五五％はこれらのグループの所有下にあった。⁽²³⁾

『ニューズ・インターナショナル』 News International は傘下に三つの系列会社をもつ。「ニューズ・グループ・

同質性と多様性 (I)

同質性と多様性 (I)

「ニューズペーパーズ」は英国で最もよく売れている日刊大衆紙「サン」と日曜紙「ニューズ・オブ・ザ・ワールド」を所有し、「バロウズ・オーガニゼーション」Berrow's Organization 傘下の二社でウイスターシャーとハーフォードシャー地方の二つの夕刊紙と三二の週刊紙タイトルを所有している(一九七八年)。このグループの基盤はオーストラリアにあり、製紙業、機械、運輸、出版業等を多角経営するモンゴロマリットである。このグループの統括者は、ルパート・マードック K. Rupert Murdoch であるが、彼はまたアメリカ合衆国で新聞、テレビ、ラジオ局を所有し、一時期「ロンドン・ウィークエンド・テレビジョン」の株式の四〇パーセントを所有し、グループの経営の下においたことがある。

『アソシエテッド・ニューズペーパーズ・グループ』ANG=Associated Newspapers Group は、ノースクリフの血統を引き継ぐ新聞グループであり、今は南仏に住んでいるロザミア子爵によって統制されている。ANGは、全国大衆紙「デイリー・メール」、ロンドン夕刊紙「イブニング・ニューズ」を所有し、系列の「ノースクリフ・ニューズペーパー・グループ」は傘下一九社でチェルトナム、ダービー、エクスター、グロスター、グリムスビー、ハル、レスター、プリマス、スワンジー、ストーク、トークイなど地方中都市に一二の夕刊紙、二九の週刊紙(一九七五年)を所有しており、またレストランのチェーン、石油、運輸業などを多角経営している。

『ユナイテッド・ニューズペーパーズ』United Newspapers は、全国紙をもたない地方新聞グループであり、バインリー、ブラックプール、ドンカスター、リーズ、ノーサンプトン、プレストン、ウイガンなど地方都市に五つの夕刊紙、三五の週刊紙(一九七五年)を所有している。系列企業の「ブラドベリー・アグニエ」社 Brabury Agnew & Co. Ltd. は「ペンチ」を含む六のタイトルの雑誌を発刊している。会長のロード・バーネットソン Lord Barnettson は、「テムズ・テレビジョン」社と「オブザーパー」紙の会長の三つを兼ねている。また彼は、一九六九年から七九年にかけて通信社「ロイター」の会長をつとめていた。

『トムソン・オーガニゼーション』 The Thomson Organization Ltd. は、『トムソン・ニューズペーパーズ』社のもとにクオリティ全国紙「タイムズ」と、日曜紙「サンデー・タイムズ」を支配し、一方地方紙チェーン・グループ「トムソン・リージョンナル・ニューズペーパーズ」社の下に、一五社、五一タイトルの地方新聞を所有している。またスポーツ新聞グループの「トムソン・ウィジィ・グロウプ」社 Thomson Wihy Grove Ltd. と、雑誌発行グループ「トムソン・パブリケーションズ」を所有している。「パブリケーションズ」は、系列五社、六二タイトルの定期刊行物を発刊している。『トムソン・オーガニゼーション』は、新聞収入よりも北海石油、旅行会社「トムソン・ホリデイズ」の収入が大きな割合を占めている。「タイムズ」は損失を続けており、一九七七年における英国トムソン社の収益における地方新聞グループは四〇%をしめるにすぎない。一九七七年ロード・トムソンの死後、この社の支配はカナダに移った。

『リード・インターナショナル』 Reed International は英国に基盤を置いている多国籍企業であるが、他の企業が多業種グループであるのに、新聞、雑誌を中心に経営を行っている情報企業である。グループの一方の柱である「ミラー・グループ・ニューズペーパーズ」を通じて「デイリー・ミラー」「サンデー・ミラー」「サンデー・ピーパー」 「スポーツティング・ライフ」を発行し、その系列の地方新聞グループは英国の西部デボンを中心とする一〇の新聞を所有し、スコットランドで日刊紙「デイリー・レコード」と日曜紙を発行している。グループのもう一方の柱であるIPC—International Publishing Corporation Ltd. は一大雑誌帝国をかたちづくっていて、(i)雑誌部門は、Woman, Woman's Own, Woman's Realm, New Musical Express など知名度の高い雑誌七二のタイトルを発行し、(ii)ビジネス誌発刊部門は、一八の子会社二〇四におよぶタイトルの定期刊行物を発行している。英国における新聞所有の形態は、日本におけるより体系的な経営組織に組みこまれており、その構造は複合的で多面体としてとらえられなければならない。『リード・インターナショナル』社は、他に製紙業、パッケージ業を経営している。

同質性と多様性(一)

同質性と多様性(一)

「ファイナンシャル・タイムズ」を所有している S. Peason and Son 社は、蠟人形館の「マダム・タッソウ」Madame Tassau's や陶器の「ドールトン・チャイナ」Doulton China を経営しているが、英国最大の地方新聞グループ「ウエストミンスター・プレス・グループ」Westminster Press Group を系列下においている。バロー、バジルドン、バス、ブラドフォード、ブライトン、ダーリントン、オックスフォード、サウス・シールズ、スウイドン、ヨークにおける夕刊紙、約九〇の週刊紙をこのグループは支配している。さらに出版業界における「ロングマン」Longman、 「ペンギン・ブックス」 Penguin Books、 「エコノミスト」誌 The Economist も同社の系列下にある。

フリート街の最も新しい新聞企業グループは、『エクスプレス』を中心に一大新聞帝国を形づくっていたビーバーブルックの後継者である『トラファルガー・ハウス』である。同社は、もともと不動産業を中心に海運業、クナード汽船、ホテル業、リッツホテルなどを多角経営しており、新聞産業とは無縁の存在であった。新聞が産業構造のなかで生き残るために新聞を中心に多角経営化するという日本の新聞経営の図式とはちがって、ここでは、新聞は多角化企業の一環に組み込まれるという図式がある。一九七七年に、日刊全国紙であり、大衆紙である「デイリー・エクスプレス」、日曜全国紙「サンデー・エクスプレス」、ロンドン夕刊紙「イブニング・スタンダード」を収め、一九七八年に日刊全国紙「デイリー・スター」を送り出している。この新興勢力としての新聞グループは、新聞所有の傾向を象徴している。政治経済界の有力者による政論、威光獲得の用具といった形態は完全に没落し所有者個人の顔は、資本のうしろに退いた。

このような新聞の企業化の形態は、地方新聞においても事情はかわらない。「イースト・ミッドランズ・アライド・プレス」 East Midlands Allied Press、 「イースタン・カウンティ・ニューズペーパーズ」 Eastern County News-papers 等の中規模の新聞グループ、 またリバプール、プリストル、ノッチンガム、バーミンガムといった地方大都市の新聞は、コングロマリット化した新聞グループとは別に独自の企業系列をかたちづくっている。

- (1) Bob Bloomfield, 'Look-A-Like Japanese Newspapers,' November, 1979, Newspaper Report pp. 36.
- (2) Charles Wintour, Pressures on the Press, André Deutsch 1972, pp. 213~14.
- (3) キングスレー・バーン『島田器説「新聞と大衆」岩波書店』一九五五年、一九七頁。
- (4) Simon Jenkins, Newspapers-The Power and the Money, Faber and Faber, 1979, pp. 32-33.
- (5) 『図説』 Dennis McShane, Using the Media, Pluto Press, 1979, pp. 16~17. 『メディアの力』 社会的問題の探求のふし』 Fred Hirsch and David Gordon, Newspaper Money, Hutchinson of London, 1975, pp. 13~15. 『メディアの力』
- (6) J. H. Goldthorpe, Social Mobility and Social Structure in Modern Britain, Oxford University Press, 1980.
- (7) A. H. Halsey, A. F. Heath and J. M. Ridge, Origins and Destinations: Family, Class & Education in Modern Britain, Oxford University Press, 1980 (『日本社会学』入道長編のたのしみ読書クラブの巻)
- (8) Ian Bradley, 'How the British have kept up their class Garricks', The Times, pp. 10, January 9 1980.
- (9) Ian Jackson, The Provincial Press and the Community, Manchester University Press, 1971, pp. 35-36.
- (10) Fred Hirsch and David Gordon, 編譯『 pp. 57.
- (11) TUC Publication, Media Coverage of Industrial Disputes January and February 1979.
- (12) Simon Jenkins, Newspapers-The Power and Money, Faber and Faber, 1979, pp. 105.
- (13) 『図説』 Dennis MacShane 編譯『 pp. 14~16. 『メディアの力』
- (14) TUC Publication 編譯『 pp. 13.
- (15) Fred Hirsch and David Gordon, 編譯『 pp. 53.
- (16) Colin Seymour-Ure, The Political Impact of Mass Media, Constable & Co Ltd, 1974, pp. 168 以下. 『メディアの力』
- (17) Brian Wilson, 'This is the Face of Fleet Street 1977' in Journalism Studies Review, Vol. 1, No. 2, June 1977, pp. 5~14. 『日本社会学』のふし』
- (18) Richard Cuterback, Britain in Agony-The Growth of Political Violence, Faber and Faber 1978, Revised edition 1980, pp. 252.
- (19) Raymond Williams 編譯『 pp. 22.

同質性と多様性 (I)

- (R) National Union of Journalist, Into the Eighties-The NUJ's claim to the Newspaper Society, 1979.
- (R) Colin Branningan, 'Journalists for the Future: Aview from GBNE's President: Newspaper Society News, No. 10, Nov. 1979, pp. 226.
- (S) Chas Critcher, Margaret Parker and Ranjit Sandhi, Race in the Provincial Press: a study of Five West Midland Newspapers, Centre for Contemporary Cultural Studies, University of Birmingham, mimeograph, 1975, pp. 27.